劇団トマレ

ねこよう

キャスト

○時任（ときとう）　あずさ（43）劇団トマレ代表

○京田（きょうだ）　玲子（れいこ）（28）劇団トマレ団員

○田町（たまち）　俊（しゅん）（27）劇団トマレ団員

○慶野（よしの）　美香（みか）（23）劇団トマレ団員

※「海賊姿」は、頭にバンダナを巻いたり帽子を被るなどする。衣装は出来るだけ日常着に見えて海賊っぽいもの（シャツと太ズボンなど）衣装替え等なく、さっと回想シーンになるように工夫する。

※小道具を置くテーブルは基本的に舞台上に置きっぱなしとする。回想稽古場シーンでも、稽古場に小道具がある。という設定。

※テーブル上の小道具は、第九場が始まる時点でもう何も無くなるように、それまでに全ての小道具を使うようにする。

○幕前

舞台上に長テーブルがあり、テーブルの上には、お茶セットやほうきや洗面器やオールがある。芝居の小道具らしい。舞台上手に、マイクスタンドが立っていて、そこに慶野美香（２３）がカンペ用紙を持って出てくる。

慶野「皆様、本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。皆様にお願いがございます。携帯電話は上演の妨げとなりますので、電源を切るか音のならない設定にお願いいたします。地震などの災害の際は係りの者が誘導いたしますので、落ち着いて指示に従っていただきます事、宜しくお願い致します。マスクの着用などはお客様の判断にお任せ致しますが、周囲の方々への咳エチケットにご協力をお願い致します。・・・・今回の公演「荒野の中を行くシップ」は、私達劇団トマレの解散公演となります。しかも本日は千秋楽です。これで、もう劇団トマレは皆様にお芝居をお届けする事は出来なくなります。本当に・・・本当に・・・悔しい・・・寂しい・・・（涙声で）みなしゃま、今までほんとーーーに、ありがとうごじゃいまし・・・」

慶野、泣き崩れる。時任あずさ（４２）が、慶野の肩を叩き、慰めながら下手に歩いていく。

暗転

○第一場・舞台裏

暗闇の中、勢いのある音楽が流れて、「ウッヒョー」「イヤー」「オリャサー」「どっせどっせ」と威勢のいい掛け声が聞こえる。

明るくなると、剣を持った海賊姿の京田玲子（２８）とこん棒を持った海賊姿の田町俊（２７）が下手から出てくる。

京田「ねえ」

田町「はい？」

京田「また間違えたでしょ？（ステップ踏みながら）♪お・れ・た・ち・か・い・ぞ・くで、右ステップじゃなくて、アンタ左だから、私にぶつかるの」

田町「（気持ちのない）あ、スイマセン」

田町、上手に去ろうとする。

京田「ちょっと。そんだけ？」

田町「俺、次の出番すぐですから」

田町、テーブルのオールを持ち上手に去る。

京田「まぁったくもぉ（舌打ち）」

上手から、海賊姿の慶野が細い剣を持って出てきて、頭を下げる

京田「あんたはいいわよねぇ。可愛らしくこーんな細い剣なんだもの。わたしなんか、こんなぶっとい剣よこんな。なにこれ？そば切り包丁かい！」

慶野「だって、しょうがないですよ。この脚本、私が書いたんですから」

京田「そうアンタが書いた！でもさ、作家って、役者を輝かす為に書くんじゃないの？自分じゃなく」

慶野「エ？・・・ちょっと・・・・よくわかんないです」

京田「あーそうよねそうよね。ごめんね。わかんない人に言った私が悪かった。でもね、最後だから言っておきたかったの」

京田、下手に去る。慶野、小道具から、赤い塗料を取って顔に塗る。海賊姿の時任が上手から出てくる。

時任「あ、今度は大ダコが船を襲うシーン」

慶野「はい（答えながらタコの足などつける）」

時任「嵐の海を行く、海賊軍団キャプテンゼロの話も、今日で最期か・・・・」

慶野「（手を止めて）この脚本・・・・うちの劇団を参考に書いたんです。演劇界の荒波を行く四人の小さな劇団。私にはすごくカッコ良かったです」

時任「・・・・そっか」

慶野「ア。五人でしたね。前田さん入れて」

時任「そう・・・だったね」
慶野「ヤバ！　出番だ！　（声色を変えて）海の悪魔、オオダコ～～～～」
おどろおどろしい音楽と共に、慶野が上手から去る。それを見送る時任。
上手から、オールを持った田町がやってくる。
田町「逃げろ～！やっぱ、四人しかいないのに海賊活劇って無理な話じゃないですか？」
時任「うん。けど、頑張って書いたからさ」
田町「こんなファンタジーみたいのやりたくて、ここに入ったんじゃないんだけどなぁ。ホラ、時任さんと前田さんが出てた、裁判もの。あれやりたかったな～～」
時任「そんなこと言わないで、最後までやりきろう」
田町「（ちょっと不服そうに）はーい」
田町、下手に去っていく。
時任、下手に去り、音楽が鳴り響く。

○第二場（回想）・稽古場
照明変わり、三年前。キョロキョロしながら、バッグを持った慶野が上手から出てくる。下手から、椅子を持った田町がやってくる。
田町「どうぞ」
慶野「あ、すみません（座る）」
田町「見学の人、、、え～と、名前は・・・・」
慶野「慶野美香です」
田町「ああそう。田町俊です。よろしく」
慶野「はい、よろしくお願いします」
田町「もうちょっとしたら、時任さんか前田さんが来るから」
慶野「はい」
田町「劇団員は今四人いるんだけど、みんな時間守んなくてね。遅刻ばっかなんだ」
慶野「そうなんですか・・・」
田町「うちの芝居、観た事あるの？」
慶野「ハイ。観ました！去年の『欲情の法廷』凄かったです～。感動しました」

田町「あ、そうなんだ。俺も、あれ観て、いいなと思ってここ入ったんだ」
慶野「最後の、弁護士役と検事役のにらみ合いが凄かったですね～。女同士の怨念の対決って感じで。実は、私も脚本書いているんです。あんな面白くはないですけど」
田町「そうか～。うちは、書くのは前田さんだからさ。書いたら見てもらえば？」
慶野「いえいえそんな。でも・・・まぁそんなに言うなら（バッグから原稿を出す）」
田町「・・・エ？持ってきたの？」
慶野「（ニコニコして）そです、これです」
田町「見せる気満々じゃん」
慶野「はいぃ」
上手から、時任が入ってくる。
時任「おはよう」
田町「おはようございまーす」
時任「ゴメンね。遅れた」
田町「大丈夫っス。慣れてます」
時任「あ、連絡くれた、見学の人？」
慶野「慶野美香です。よろしくお願いします！（頭を下げる）それで、これが私の書いた作品で、魔法使いと剣士のツンデレバトルラブコメなんですけど・・・」
時任「あの悪いけど私、前田じゃないから」
田町「その人は、時任さんの方」
慶野「あ、スミマセン！（頭を深く下げて止まる）」
間。
慶野「・・・・でした！（頭を上げる）」
田町と時任、リアクションする。
田町「慶野さん・・・ちょっと面白いね」
慶野「そうですか？」
時任「（スマホを出してかける）あ、もしもし？前田？今どこ？・・・サイゼリヤ？あんたサイゼリヤ好きね～。エセイタリア人か！あのさ、今日こそは書き上げて持ってくるって言っていたよね？次の公演の脚本。それ無いと稽古になんないんだけど・・・いや、もうちょっとでアイデアが浮かぶって、

大作家先生じゃないんだからさ。今日には完成するって言ってたじゃない・・・うん・・・うん・・・ふっざけんなヨ！書けないの人のせいにすんな！アンタの書く力の問題でしょ！とにかく、今書いた分もって至急来い。うん、そう。ダッシュな～（切る）

あ、ゴメンね。慶野さんだっけ」

慶野、目をそらして原稿をそそくさとバッグにしまう。

田町「時任さんと前田さんは、付き合い長いから、ああいうのが普通だから」

慶野「そうなん・・・・ですか？」

時任「うん。高校時代に演劇部で一緒にやってて、卒業して十年経ったくらいに、またやりたいね～って盛り上がって、劇団を二人で立ち上げたの」

慶野「なんで【劇団トマレ】って名前なんですか？名前の由来は？」

時任「う～ん・・・」

田町「名前の由来は、前田さんも教えてくれないんだよ。二人の秘密なんだって」

慶野「へー、、、そうなんですか・・・」

ドアの音と、前田「おはよ～」の声。

時任「あ、前田！！！」

時任、上手に走り去る。

田町「また喧嘩になる～。年上の女のケンカ止めるの面倒なんだよな～」

田町、困った顔で上手に追う。

慶野「（原稿を出し）あの、前田さん」

慶野、上手に去る。

○第三場・舞台裏

下手から、海賊姿の京田が剣を振りまわしながら飛び跳ねて出てくる。

京田「あたいの剣さばきを思い知ったか～！！（素に戻り）あー、ここの殺陣、動きがキツイ（息が切れて椅子に座る）」

海賊姿の田町が剣を振り上手から出てくる

田町「貴様らの剣なんか、への河童よ！！（素

に戻り）あ、京田さん、殺陣の途中の動き、違ってましたよね？　こっちに一歩飛びましたよね。マ、何とか胡麻化しましたけど」
京田「あのね～、それじゃ言わせてもらうけど、初日のあんたはその一個前でこっちに飛んできたわよ。あと、二日目の昼の回はその前の動きが逆だったし、夜の回では飛ぶのさえ忘れて棒立ちだったわよ。こう。（棒立ちする）分かる？海賊冒険活劇で、剣持った海賊が棒立ちってある？」
田町「・・・よく覚えてますね」
京田「まぁね。セリフは入りが悪いけど、人のミスは覚えてる性質だから」
田町「・・・すみません」
京田「ホント分かってる？（田町が歩き出すので）どこ行くのよ？　もうすぐ出番！」
田町「テンション下がったんで、スマホ見て、テンション上げてきます」
田町、下手に行く。
京田「スマホでテンション上げるって・・・エロ画像でも見んのか？」
上手から、剣を持った慶野が飛び出てくる。
慶野「さよなら、下っ端役人さん！（素に戻り）京田さん、ちょっと声が大きいですよ。丸聞こえでしたよ」
京田「うそ？お客さんにも聞こえたかな？」
慶野「それは、ＢＧＭでかき消されてたかなと思いますけど。でももうちょっと静かにしてください」
京田「分かった分かった」
田町の声「ああー！！」
慶野「もう、また。（下手に）田町さーーん」
慶野、下手に去る。
田町がスマホを持ち下手より出てくる。
田町「（後ろに）美香ちゃんごめんね。あ、京田さん、これ見てこれ。受付の佐川さんから、開演した後でラインが来てた。開演ギリギリになって前田さんが来たんだって！」
京田「ウソ！」

田町「ホラ、これ見てこれ」
京田が田町のスマホ画面を見る。
京田「信じらんない」
田町「俺もそうっスよ。前田さん、時任さんとケンカ別れだったじゃないスか」
京田「・・・やっぱ、解散公演の千秋楽だから来たのかなぁ」
上手から、海賊姿の時任が剣を持って、出てくる。
時任「ハッハッハ。諸君、さらば！（素に戻り、京田と田町に気づき）ん？どうしたの？」
京田「あ、時任さん、前田さんが客席に来てるみたいなんですよ」
時任「あ・・・そっか・・・・来たんだ」
田町「やっぱ、自分もいたから、気になってたんですね？」
時任「ううん。私が呼んだの」
京田「・・・・エ？呼んだんですか？」
時任「そう。ラインもインスタもスマホもブロックされてたから、いろんな人に協力してもらって、人づてに何とか伝えてもらった。今日の公演に観に来てくれないかって」
京田「でも・・・なんで・・・あんなひどいケンカしたのに」
時任「うーん、何でだろう・・・でもさ、そうしないと、なんかちゃんと終わらないような気がしたんだよね～。そっか～、あいつ来たんだ～。来たか～」
時任、喋りながら下手に消える。
田町「ヤバくないっすか？何か・・・血の雨が降りそうな・・・」
京田「大丈夫だって。あの二人に限って、そんな事あるわけないよ・・ね？」
田町「エ？　俺、分かりませんよ！」
京田「だよねー」
京田、下手に去っていく。残された田町、テーブルの茶飲みセットを持って上手に去る。

○第四場（回想）稽古場

照明変わり、二年前。京田が下手から入ってきて、柔軟運動を始める。軽く、発声練習をし始めると、上手からバッグを持った慶野がやってくる。

慶野「おはようございまーす」

京田「（発声練習のまま）おはよーう」

慶野「（バッグから用紙を出して）京田さん」

京田「あんたさぁ、脚本書きあがったら、最初に私に読ませるのやめない？」

慶野「だって、いきなり前田さんに読んでもらうのって緊張するじゃないですか。だから、先ずは京田さんが面白いって言ってくれたら、前田さんに読んでもらうんです」

京田「あたしは試金石か」

慶野「エ？・・・しきん・・・せき？　イス？」

京田「あんたホントに物書き目指してんの？」

慶野「はぁ・・・」

京野、一息ついて椅子に座って読み始める。それを慶野、じーっと見つめる。

京田「あー、圧で読みにくいわ！」

慶野「すみません」

京田「ったくもう（また読み始める）」

慶野「そう言えば、京田さんは、なんでここに入ったんですか？」

京田「エ？」

慶野「いや・・・まだ聞いたこと無かったなぁ～と思いまして・・・」

京田「私はさぁ～、最初は違う劇団に入ってたけど、こんな性格だから演出とか他の役者とぶつかってケンカしちゃってさ」

慶野「あ～、やっぱりそうですか」

京田「（何か言いたげだが我慢し）そんでフリーで役者やってた時に時任さんと会って、ここの客演で出演して、うちだったら私と前田しかいないからケンカになんないから入らない？って誘われて」

慶野「へ～～、時任さんに呼ばれたんですね」

京田「うん。（また読むのを再開し）そう言えば前田さんさ、この前やった【イノシス】

が評判良かったから、【演劇集団楽ら】から脚本書いてくれないかって依頼があったみたいよ」

慶野「え？【演劇集団楽ら】って、何人もプロの役者さんが出てるトコじゃないですか。すごいですね～、さすが前田さん」

京田「でもね～、プレッシャーが半端ないみたい。下手なもの書けないって悩んじゃって、四キロくらい痩せたってボヤいてたよ」

慶野「前田さんが四キロ？そんな減ったら・・・」

京田「減ったら、なに？」

慶野「いや、いいダイエットかな～と思って」

京田「（吹き出し）あんたも人の事言えるの？」

慶野「いや、前田さんに比べたら・・・」

京田「それ絶対失礼なほうだからね（笑う）」

慶野「だって、前田さんて、こんなじゃないですか。こんな」

京田「もうやめなよ。前田さん来てたら、聞かれちゃうヨ」

上手に時任が出てくる。

時任「バッチリ聞こえてたけど」

慶野「！」

京田「時任さん、前田さんも一緒ですか？」

時任「ううん」

京田「アレ？だって、二人で話してたんじゃないんですか？」

時任「話してたよ。サイゼリヤで。とりあえずさ、前田は今は楽らの方の脚本書くのに集中したいんだって。だからうちの次の脚本まで手が回らないって」

京田「じゃあ、次の公演はどうするんです？もう劇場抑えちゃったじゃないですか」

慶野「あのぉ・・・（京田から脚本を奪って）私、こんなの書いてきたんですけど・・・」

慶野、脚本を時任に渡す。時任、受け取り、読み始める。

慶野「・・・どうでしょう？」

時任「（読むのを止めて）後で読んでおくね」

時任、脚本をテーブルに置く。
慶野「あ・・・」
時任「次の公演は、【おつかいアリさん】の再演で行くわ。アリ世界でのパワハラがテーマのやつ」
京田「【おつかいアリさん】？私、あの女王アリの役をやりたかったんですよね～。」「エサ取ってこい。何ぃ～、冬だから無かった？この給料泥棒！！」」
慶野「そういえば、前田さんは一緒じゃなかったんですか？一緒にサイゼリヤで話してたんですよね？」
時任「ああ・・・そのうち来るんじゃない？なんか喉乾いちゃったな。冷蔵庫に烏龍茶無かったっけ？」
慶野「はい。見てきます」
慶野、下手に去る。
時任「・・・京田ちゃん」
京田「はい？」
時任「例えばだけど・・・前田がトマレからいなくなったら、どうする？」
京田「エ？　前田さん、やめちゃうんですか？」
時任「いや・・もしもの話よ、もしもの」
京田「ああ。私は、別にそのままです。私はほら、フリーでやってたトコを時任さんに拾ってもらったみたいなもんだから」
時任「そっか・・・・ありがと」
京田「いえ」
時任「なんか、美香ちゃん遅くない？（下手に）美香ちゃーん、大丈夫～～」
慶野の声「大丈夫でーす。今、床拭いてます」
京田「あ、こりゃこぼしたな。全くもう・・・」
京田、下手に去る。時任もため息をついて下手に去る。

○第五場・舞台裏
上手から、お盆を持った海賊姿の田町が出てくる。
田町「（テーブルにお盆を置いて）何で海賊が日本茶出すんだろうなぁ～。『ものども、

キャプテンシャーロックとの会談だ！』『粗茶でございます』海賊なら普通ワインだろ？　まぁもういいんだけどさ、どうせ解散公演なんだから。あー、解散。か・・・」

下手から、海賊姿の京田が出てくる。

京田「いたね、前田さん」

田町「いましたね。客席の一番後ろの真ん中に。下向いて、チラチラ観てましたね。それより、次の出番もうすぐっスよ」

京田「あ、ヤベ！！」

京田、上手に去る。田町、下手に去る。上手から海賊姿の時任が出る。

時任「裏切ったなキャプテンシャーロック！」

上手から、イカに扮した慶野が出てくる。

慶野「船を壊すぞ！イカイカ～～～！！（素に戻り）はぁ～～～。（自分を見てる時任に気づき、軽く頭を下げる）」

時任「美香ちゃん。今度はイカね」

慶野「はい。自分で書いたものですから、頑張ります。でもこれが最後ですものね～」

時任「そう・・ネ」

慶野「私、今回初めて自分の作品を公演してもらって、前田さんの気持ちがちょっとだけ分かったような気がするんです。自分の書いたものをやるのって、嬉しいような、恥ずかしいような、ドキドキするような、・・・とにかく、いろいろです」

時任「・・・・・」

慶野「時任さん、どうしたんですか？」

時任「ううん、なんでもない。あ、出番のキッカケ」

慶野「あ、はい。イカイカ～」

慶野、下手に去っていく。時任、それを見送って上手に去る。

波の音。驚きの叫び声。

上手から京田が出てくる。

京田「あ～～、あそこのセリフ噛んだ！今日こそは噛まないようにと思ってたのに！『キャプテン！イカが怒って帰っていき

ました！』あ、言えた。今言えてもしょうがないんだよ～」

京田、下手に去る。

下手から腕に矢の刺さった田町が出る。

田町「（腕をおさえ）グオ～～、キャプテン～」

田町、そのまま上手に消えていく。

上手から、時任が出てくる。

時任「船が沈む！（素に戻り）残り四十分か・・・」

時任、下手に去る。

暗転

○第六場・舞台裏

暗転の中、京田の声が響く。やや小さな声で。

京田の声「みんな死んだ。私だけが生き残った。デンバー。レノ。キャプテンゼロ。時にはケンカをした事もあったが、今思えばどいつもこいつもいい奴らだった。いや、いい海賊だった」

明かりが入る。海賊姿の京田がセリフを読み、それを海賊姿の田町が椅子に座って眺めている。

京田「仲間がいなくなった海賊船の中で考える。あいつらは何の為に生きて、死んだんだろう？どうせろくでもない奴らだったから、女を抱く為とか旨いものを食う為とかいう事しか言ってこないだろう。さぁこれから一人になって私はどうしようか？また他の海賊どもを集めるか？いや、あいつらほどろくでなしで、あいつらほど私の性に合った奴らはいない。だから私は・・・私は・・・あー、ここでいっつも詰まる！」

田町「このラストの長台詞、一回もちゃんと言えた事ないですよね？」

京田「うるさいわね。今日こそは大丈夫ヨ！」

下手から海賊の慶野が走って出てくる。

慶野「今、受付さんからＬｉｎｅ入っていて、前田さんが来てるって！」

京田「あー、知っちゃったか」

田町「俺らも知ってたんだけど、美香ちゃん

には黙っといたんだよ」
慶野「何でです？」
京田「だってあんた、それ聞くと、前田さんの事意識してガチガチになるでしょ？」
慶野「そんな、なりませんよ！前田さん、どの辺の席に座っているんです？」
田町「か・・・上手の真ん中くらいの席」
音楽が流れる。
京田「あ、休憩終わる」
慶野「上手の真ん中ですね。わっかりました！」
田町「あんまり意識しない方がいいヨ」
慶野、上手に去る。
京田「前田さん、センターの奥の席よね？なんで嘘教えたの？」
田町「いや、なんとなく・・・」
京田「あーあーあー。美香ちゃんかわいそ」
田町「だって、正直に言ったら、絶対前田さん見て緊張しますよ」
田町、京田、下手の壁の隙間を覗く。
京田「美香ちゃんの視線、完全に上手だ」
田町「意識しすぎだろー」
京田「あ、セリフ言いながらチラ見した。またチラ見。また！」
田町「（前を向き）じゃあ、そろそろ行くかなぁ。いっちょ、派手に死んで来るか」
京田「あ、もうそのシーンか。早いな」
田町「・・・そうですね」
田町、上手に去る。京田はまた壁に目をやる。銃声。
時任の声「デンバー！！！」
○第七場・（回想）稽古場
壁に目をやったままの京田、頭の頭巾をとり、照明が変わる。
一年前の稽古場。京田は時々、ひどい声を聴いたようにしかめ面をこちらに向ける。
田町が上手から入ってくる。
田町「おはよっす。あれ？どうしたんですか？
京田「シ！今、時任さんと前田さんがこっち

の部屋で話し合ってんの」
田町「え？じゃあ、前田さん新作出来たんですか？劇団楽らが終わったから、こっちでまた書くって言ってましたよね？」
京田「そううまくはいかないみたい・・・あ！」
京田、目配せして合図する。田町も気づいてスマホを出したりして、何気ない仕草を装う。
下手から、時任が来る。
京田「おはようございまーす」
田町「おはよーございまっス」
時任「・・・おはよ。あ、二人来てたんだ」
京田「はい、さっき来たトコです。ネ？」
田町「ああ、はい。偶然京田さんと下のエレベーターで一緒になって」
時任「ちょうどいいわ。二人には先に話しておくけどさ、前田が抜けるから」
京田　田町「エ？」
京田「抜けるって・・・どういう意味ですか？」
時任「だから、ここを辞めるって事」
田町「でも、何で？」
時任「本人曰く、一年間自分は楽らの脚本書く為に、トマレの活動を休ませてもらった。でも一年かけた渾身の作品がぼろくそ言われた。ちょっと今は書こうと思うだけの気力がない。書けない私は役立たずだ。役に立たないなら、辞めたい。って」
田町「時任さんは、何て言ったんですか？」
時任「役立たずってそんな事はないし、書けなくても、出演するだけとか、小道具とか制作事務とか、やる事は山ほどあるよって言ったよ」
田町「そしたら？」
時任「いや、私が貢献出来るのは、作品を作る事だけだ。って譲らなくて、それで次第に言い合いになっちゃって・・・」
京田「じゃあもういいから辞めたらいいじゃない！って言っちゃった」
時任「・・・なんで知ってんの？」
京田「いやぁ、時任さんならそう言いそうだ

なぁ〜って思って・・・」
時任「まぁ、お互い感情的になっちゃったけどさ」
田町「・・で、前田さんは？」
時任「もう出てっちゃった。たぶん、戻ってこないと思う」
田町「え・・・美香ちゃんはどうします？あのコ、前田さん慕ってるじゃないスか？もし知ったらショックじゃないかなぁ」
時任「・・・これから考えるよ」
京田「次の公演、どうしましょう？新作をやりますって大々的に発表してますよ？」
時任「・・・・これから考えるよ」
田町「お金の面も、前田さん一人抜けると痛いですよね？今まででギリギリだったのに」
時任「(強く)これから考えるから！(ハッとして微笑んで)いやさ、まぁ、なんとかなるよなんとか」
時任、下手に去る。
京田と田町、ごちゃごちゃ言い合いながら下手に去っていく。

○第八場・舞台裏
銃声が聞こえる。
京田の声「レノーーーー！」
海賊姿の慶野が胸を抑えて上手から出てくる。
慶野「・・・前田さん、見ててくれたかな？前田さんに向けて倒れたの分かってくれたかな？(演技になり)あとは・・頼みますぜ(倒れる。すぐに起き上がり)前田さん、私の書いたの観てどうだったかなぁ。後で感想聞きたいなぁ。あー、でも怖いような。アレ？前田さん眼鏡かけてなかった？あ、いけない。次は洗面器だ」
慶野、テーブルの上の洗面器を持って上手に行く。上手から京田が出てきて、手を出す。
慶野「はい(洗面器を渡す)」
京田、洗面器を持って再度上手に去る。

慶野、テーブルの上のほうきを持って下手に行く。下手から時任が出てきて、手を出す。

慶野「はい（ほうきを渡す）」

時任、ほうきを持って再度下手に去る。バシ！バシン！と打撃音の後、下手から、仮面を被った田町が出てくる。

田町「（仮面を取りながら）痛～。二人とも今までより力が入ってて痛ぇよ」

慶野「楽日ですからね」

田町「美香ちゃんはこれからどうすんの？トマレじゃなくて、他で芝居やるとか？」

慶野「私は・・・この後・・・ですね」

田町「うん」

慶野「びっくりするかと思うんですけど、本当―に何にも考えてないんです。ひょっとしたら、このままお芝居辞めちゃうかもしれないです」

田町「へー、そりゃもったいない気がするけどな。書けるし、演技も出来るのに」

慶野「今回、自分で書いて、役者でもやってみて、あー私にはどっちの才能も無いんだな～って嫌ってほど思い知りました。だから、もういいかなぁ～。でもお芝居楽しいしなぁ～。って迷ってる自分がいます。田町さんはどうするんですか？」

田町「俺？　俺は・・・またどっかの劇団とか入って、役者やるかなぁ～。やっぱ芝居好きだしね」

慶野「でも、好きだけじゃやり続ける事って難しくないですか？」

田町「好きだけじゃ・・・ダメかなぁ～。じゃあ他に何がいるんだろう？」

慶野「やっぱ・・・才能、とか？」

田町「そうすると、才能がない、その他大勢みたいな人は、やってちゃいけないの？」

慶野「う～～ん・・・・」

銃声。銃声。銃声。銃声。銃声銃声。

京田の声「キャプテーーーン！！！」

田町「・・・キャプテンゼロが死ぬ場面さぁ、

銃で撃たれすぎじゃない？一発でいいんじゃないの？」
慶野「だって、キャプテンゼロですよ。やっぱりこれくらいは撃たれないと」
銃声。
京田の声「キャーーープテーーーン！！」
田町「いや撃たれすぎだって」
慶野「そうですか？」
田町、下手に去る。
時任、上手から出てくる。
慶野「あの・・・時任さん。前田さん・・・・来てるんですよね？」
時任「ああ・・・そう。来てるよ」
慶野「前田さん辞めちゃって、何でその後も何もしてないんですか？」
時任「あのね美香ちゃん。それは、前田本人にしか分からないよ」
慶野「そっか・・・時任さんでも分からないんですね。じゃあ、私、本人に聞いてみます。終わった後で捕まえて」
時任「（首を振り）アイツの性格だと、終わったら逃げるみたいに帰っちゃうと思う」
慶野「そんな・・・じゃあ、今聞きます」
時任「今？」
慶野「はい」
時任「どこで？」
慶野「舞台で。客席の前田さんに」
時任「だって、あなたもう死んだんだよ。今、京田ちゃんがラストシーン喋っているし」
慶野「だから、私が出てって、そこで聞いちゃいます」
時任「いやいや、無理でしょ？芝居ぶち壊しになっちゃうヨ」
慶野「でも・・・私、聞きたいんです！」
慶野、上手に走って去る。
時任「ちょっと！美香ちゃん！（下手に走って）田町君、田町君！」
時任、田町を連れて下手に出てくる。
田町「美香ちゃんが暴走した？エ？よく分からないんですけど」

時任「いいから！」
田町、時任を引っ張って上手に消える。
暗転。

○第九場・表舞台
波の音。海賊姿の京田が、歩きながら台詞を発している。
京田「いや、あいつらほどろくでなしで、あいつらほど私の性に合ったやつらはいない。だから私は・・・私は・・・」
慶野、下手から出てくる。固まる京田。
京田「・・・レノ。死んだ、レノ。どうした？いったい？ホントに・・なぜ出てきたんだ？」
慶野「・・・ゴースト」
京田「え？」
慶野「レノのゴーストです。（舞台センターに立って合図をするとピンが入る。客席上手に向かって）前田さん！どうして全部やめちゃったんですか？私、前田さんの書いた作品大好きなんです。だから、また書いてほしいんです！私の作品なんて誰も愛してくれなかったけど、書きましたよ！
あれ？・・・前田さんじゃない？」
下手から、時任と田町が出てきて、慶野を抑えようとする。それに抗う慶野。
京田「おお・・・デンバー。キャプテンゼロ。みんなゴーストか？ゴーストでもいい」
京田も加わって、慶野を抑える。揉めてる中、時任がピンスポットに入る。
時任「ねえ前田・・・前田・・・あんた覚えてる？久しぶりに会った居酒屋で、仕事つまんねえな。じゃあ一緒に劇団でも作っちゃうかって盛り上がった夜。私、冗談だと思ったけど、あんたが、劇団の名前は劇団トマレにしようよ。って言ってきたよね。何でトマレなのって聞いたら、時任のトと、前田のマ。じゃあレは何？って聞いたら、あんた、レモンのレ。って。しょうもないなぁ～。考えてなかったでしょって笑って。知り合いの役者に声かけて、初めて公演し

たよね？楽しかったな。大赤字だったけど・・・三回目の公演を観に来た、東京の劇団の演出家が、ボロクソに劇評書いてたからさ、そいつの住所調べて、二人でそいつの家のドアノブに鼻くそべったりつけて逃げたよな？・・・今考えたら完全に違法だけど。なぁ前田。京田ちゃんが入ってくれた時嬉しかったよな？劇団員第一号だって。田町君が入ってくれた時、男の子を主役出来るってあんた喜んでたよな？美香ちゃん入ってきて、あんた泣いてたよな？あんなガッツは私にないって。なぁ前田。私とあんたの作ったトマレが無くなるんだよ。世の中に、星の数ほどたっくさん劇団とかあるけど、その中にトマレも砂粒みたいに埋もれて、私たちの作ってきた芝居も、みんな忘れられてっちゃうのかな？なぁ前田。私達の十二年って何だったんだろうね？私は寂しいよ。あんたはどうなんだろう？私とあんた、何で今、舞台と客席ってこんな距離でしか話せなくなっちゃったんだろう？なぁ前田。私・・・あんたの気持ち、ちゃんと分かってたのかな？私・・・やっぱあんたの事好きだよ。なぁ前田・・・前田・・・ごめんね・・・」

時任、泣き崩れる。京田、田町、慶野、時任に駆け寄り、立たせようとする。照明も通常明かりになる。

田町「京田さん、締めて」

京田「・・・・え？」

田町「締めて」

京田「エ・・・エェェェ？こんなのの後で？」

慶野「お願いします」

田町と慶野、時任の肩を抱えて上手に消える。残された京田、苦しそうな顔になる。波の音量が高くなる。

京田「・・・みんな死んだ。そしてゴーストになってさっき蘇った。私も驚いたけど。でも私は行く。死んだものの思いを持って。そうさ、私は新しいキャプテン！キャプテ

ンオムライス！たった一人でも、時には嵐の、時には大波のこの大海を、死んだ仲間の意志とともに突き進んでいく！（やけのように）やっぱ締まるわけないじゃない！」

雄大な音楽がかかり、暗転。

明るい音楽がかかり、明転すると上手から涙を拭いた慶野が出てきてお辞儀をする。上手から田町が出てきてお辞儀をする。上手から京田が涙を拭う時任を連れてきて一緒にお辞儀をする。

時任「皆さん、本日はありがとうございました。そして・・・十二年もの長い間、本当に、みなさんありがとうございました！」

最後に四人一緒にお辞儀をして、暗転

○第十場・稽古場

一年後。下手から、脚本を持った田町が出てきて、脚本を広げて椅子に座る。

ドアの音。田町、上手を見る。

田町「おはようございまーす・・・早いっすか？脚本も読んどきたいし・・「欲情の法廷」これって、オリジナルは検事と弁護士が女でしたよね？それを男に改定して・・・神山さん、これ書いた「前田ひかり」って人知ってますか？・・・知らない人なんだ。シナリオサイトで見つけて、面白かったからこれにしたんですか・・・あぁ・・・はい・・・あ、それこないだの居酒屋で聞きましたよ。昔、神山さんの家のドアノブに鼻くそがいっぱいついてた事があったって話でしょ？誰かに恨まれてたんじゃないんですか？神山さん、結構辛口だから。ハハハ・・・（何かを思った顔）あの、すみません神山さん。いや、大した事じゃないかもしれないんですけど・・・俺、ちょっと嘘ついてました。・・・俺、神奈川でフリーで役者やってたって言ってたじゃないですか？あれ、実は嘘なんです。すみません。神山さん・・・劇団トマレって、知ってま

すか？」

暗転。

そして、音楽。

【私好みで言うと、Hump Backの『拝啓、少年よ』が流れたい。でもそこはそれぞれお任せです】

了